

駿河雛具・雛人形

○雛具

静岡には浅間神社造営、久能山東照宮の改修で、全国から優秀な職人が来静し、職人と技術が残りました。また、温暖多湿の気候が漆器の製作に適していたことから、漆塗りの職人が多数いました。このような背景の中で、雛具については実用品ではなく装飾品であるため、華麗な加飾方法である蒔絵が盛んであったことが発展の原動力でした。

雛具には、五職とって、指物師、挽物師、塗師、蒔絵師、金具師と工程ごとに専門の職人がいて、分業体制でそれぞれの作業をします。それを最後に組立てまとめるのが産地問屋（メーカー）の仕事です。

静岡は古くから木工の町、塗りものの町、竹細工の町として栄えてきました。江戸末期から昭和30年頃まで、一番町から八番町までの番町、幸町、田町、新富町という静岡の西部界隈は職人の町として、さまざまな伝統工芸の職人や生産地問屋が集中して住んでいたため、分業体制に適していました。

静岡の本格的な雛具の製造は、明治15年（1882）頃から始まり、大正12年（1923）の関東大震災により罹災した東京の職人が静岡に移り住み、雛具業界はにわかに活況を呈して、静岡が雛具の全国的な産地としての地位を築きました。

第二次世界大戦後は生産不可能になっていましたが、戦後、占領軍の土産品として人気が出て、少しずつ生産が復興しました。昭和22年（1947）には、「静岡雛具商組合」が、昭和24年（1949）には「静岡雛道具協同組合」、「静岡雛具商工組合」が、昭和25年（1950）には、「静岡雛人形木漆貿易協同組合」が設立されました。

また、指物、挽物、塗師、蒔絵師、飾金具などの業者がまとまって「静岡雛木漆連合会」も結成され、雛具製造に従事する技術者の協力体制も完成しました。

昭和25年（1950）、静岡工芸指導所で、静岡特産雛具人形展示会を開催、全国の取引業者を招きました。これが、復興した静岡雛具・雛人形業界の最初の展示会でした。

○雛人形

雛人形は、江戸時代から志太郡の一部で天神が作られていたのがこの地方の嚆矢であり、菅原道真を祭った桐塑（とうそ）による煉天神が出来、その後衣装を着せた天神が作られ現在まで続いています。

静岡で雛人形が本格的に作られ始めたのは、昭和6～7年（1931～1932）で、雛人形の産地である埼玉県岩槻市や東京都から人形師を招き、技術を導入して生産を始めました。

静岡市商工課の委嘱によって、昭和12年（1937）に蕨崎竹次郎は、雛人形15人揃いの作り方講習会を開き、業者の指導にあたりました。

昭和30年代後半から需要の拡大により、衣裳の上半分と下半分を別々に作ることで、分業による生産が可能となり、静岡では量産化が進みました。

駿河雛人形の特徴は、胴柄作りであり、人形の衣裳の柄や色彩に製作者の個性が反映され、その中でも腕折り（振付け）は製作者の個性が最も発揮される部分です。

静岡の雛人形界のただ一つの弱点は、天神などの大きな頭（かしら）は作れても、雛人形のような小さくて精微な頭がほとんど出来なかったことです。

頭の生産は、木地、胡粉塗、面相書き、結髪と分業化し、それぞれ大変根気のいる作業で、静岡人の気質に合わなかったともいわれ、昭和初期から幾度となく職人をスカウトして頭の実験導入を図りましたが、定着することはありませんでした。

しかし、雛人形の胴の実験生産は、後進地であったことから先進地に学び、熱心に研究努力したことや静岡の塗師や木工職人などが一か所に集っていた形態を上手に生かして、手工芸の分業専門化量産化が可能となったことで、全国有数の産地となったのです。

駿河雛具・雛人形は、平成6年（1994）伝統的工芸品の指定を受けました。